秘印想念法

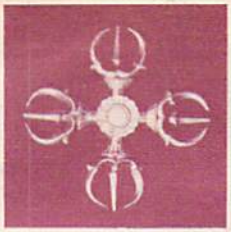
念法加持で手に入れる超能力と願望達成！

実用スペシャル

文＝金澤友哉
イラストレーション＝村上宗義

印を結び、念をコントロールする。そして、宇宙の神秘力と一体になり、現実世界に変化を引き起こすことに成功すれば、運勢好転、願望達成、超能力発揮と、あらゆる神秘が可能になる。その奥義を伝える「念法加持」の想念法を初公開！

序 運勢好転の心髄〜念法加持の秘法



←(右)宇宙の法則を神格化して表現した大日如来像。(左・左ページ)密教の各種法具は、宇宙の法則を象徴している。

変化を引き起こし仏の恩恵にあずかる念法加持の神秘力

念法加持——この聞き慣れない言葉は、いったい何を意味しているのか？

「念法」とは、印や真言によって念力や超能力を発生させ、活用する方法のことである。

「加持」とは、願望達成のための加持祈禱のことであり、願望を達成させ、神秘的な力による運勢の好転を引き起こす術だ。

一言でいってしまえば、念法加持は加持祈禱の理論であり、加持祈禱の形態のひとつである。そして、加持祈禱に必要な奥義、絶対に必要な作法を端的に表現した神秘の言葉でもある。

加持祈禱は、願いの達成、運命の開拓によって人々に感銘を与え、人々が神秘的な「仏の法」に対して感動し、帰依する心を呼び起こさせる仏の道である。

と同時に、超越的な宇宙意識や、神秘的な「仏」の存在を直接的に知るための神秘の技でもある。

ただし、ここでいう「仏」とは、後世の欲ぼけ祈禱師もどきが生みだした偶像ではない。周囲の状況に影響を受けて構成された小宇宙「人間」と、人間に影響を与える大宇宙である「宇宙自身」の背後に存在する「超意識」のことである。

この超意識である仏の力によって、人間の潜在能力が最大限に生かされたとき、人間は自己の運勢にさまざまな変化を引き起こすことができ、その恩恵にあずかることができるのである。

こうした宇宙の法則を神格化して、海外では「神」や「アドナイ」「アフラ・マズダ」「エホバ」などのさまざまな名称で呼ぶ。わが国では神道の「天照大神」、仏教の「大日如来」などがそれに当たる。

また、阿弥陀如来、釈迦如来なども この宇宙本質の「各部分」であり、こうした宇宙の原理などを象徴化して収録したものが、曼荼羅ということになる。

曼荼羅、梵字、印、法具、仏像など、密教の各種法具は宇宙の法則を表し、またコントロールするための道具＝ハードウエアなのだ。

それらハードウエアを動かし操るのは、人間の意志や思考といった形のないもの＝ソフトウエアである。

こうして、宇宙に影響をおよぼすハードとソフト、そして宇宙の3つが関係を持って、密教の願望達成法「加持祈禱」が成立する。

このとき重要になるのが「念」である。念とは、現実世界にまで影響をおよぼすほどに強力な精神の力、想像の力だ。

この念の力と、ハード、ソフトを最大限に活用して、宇宙の変化、周囲の変化を引き起こし、その恩恵に浴する神秘の秘法が「念法加持」なのである。

筆者が、古代からの伝承や密教秘儀の中から復活させた各種秘法は、この念法加持の理論を十分に生かしたものである。

悪運勢のサイクルを見事に断ち切った三密の念と観の威力

念法の力がもたらす影響は非常に大きい。そして、運勢の好転は、念法加持の威力なくしてはありえない。

一例として、運勢の後退によって、会社での対人関係が悪化してしまった女性相談者のケースをあげておこう。

彼女の場合、他人に誤解を受けやすい悪運勢に陥っていた。そのため、どうしようもないほどに対人関係が悪化し、本人の努力だけではいかんともしがたい状況だった。

よかれと思ってすることが、すべて

裏目に出る。悪運勢のサイクルは、いったん回りはじめると、本人の意志や希望とは無関係に、最悪の事態へと突き進むものだ。そうなると、もはや個人の力ではどうにもならない。

そこで筆者は、彼女に対して妨害する力を発している星に供養の修法を行い、逆にその星からもたらされるよい影響を受け取るための護符を授けた。

ここでの念の働きを解説すると、以下のようになる。

まず、運勢の好転を強く願う私と彼女の「念」が、「観」によって星に送られる。

観については後述するが、このようにして念を送ることを「想念」、もしくは「送念」と呼ぶ。

さらに、星が独自に持っている念の波動から、いい影響を与える念のみを彼女にもたらすために修法を行う。その修法によって、運勢好転の念は護符に集約され、それを持つことで、彼女には好影響のみがもたらされるようになる。

こうして、彼女の誤解を受けやすい悪運勢は、私、彼女、星を司る仏の3者の念によって好転され、対人関係はすみやかに改善されたのである。それは筆者も驚くほどの利益であった。

「仏」「僧侶」「相談者」の中に眠る3つの秘密の力を結びつけて行う加持祈禱。普通、この「3つの秘密＝三密、三力」を結ぶものが「縁」であると説く場合が多い。

その縁の実態は、人間の思考のかたまり＝念であり、念をコントロールする意志の力が観である。

行者の念するものと、祈禱を必要とする人の念するもの、そして、仏として象徴される宇宙の力・宇宙の知恵の念するものが一体となり、行者の観の力によって現実世界に流れ込んだとき、この3者の念の力は数万倍もの効力を発揮し、単なる空想の力が現実を動かす力となるのである。

集中した念が、仏やさまざまな修法によって倍加されなければ、加持祈禱はその効力を効果的に発揮することはできない。

実践する僧侶のみが知りうる祈禱の心髄、それが念法加持なのである。

修一 観法と念法

←悟りの境地を体験する禅は、観の強化法でもある。

さて、実修の場においては、想像力を駆使してイメージの世界を観ることを「観」と呼ぶ。

体験した者だけが知りうるその世界は、直接的な影響力を発することはないが、人間の意識や行動に目に見えない影響を与える。

同じように、見えないエネルギーである念をコントロールする場合にも、観は非常に有効である。

超能力者・秋山眞人氏は、目で「観る」という行為を通じて、念の影響を与えたい物質やものごとを心の中に飲み込み、爆発的な想像でそれを変化させることにより、念の力＝超能力を発揮する。

密教でもこの「観る」、さらに精神の中で「観る」という2段階の「みる」行為によって、念の力を具体的に発揮する。

つまり、念を発揮させるためには、観る力＝観の能力を開発することが最初の課題となるのだ。

観を用いて念を練り、強化することによって、念の流れは修法者の意志のもとに誘導され、現実の世界に変化をおよぼす。

観の力によって強められた念を、願望達成の際に使用する技が加持祈禱であり、この一連のプロセスこそが、念法加持の奥義なのだ。

それではこれから、観の強化法と、観の力を用いた念の強化法を実修してみよう。加持祈禱を禁止している宗教、宗派でさえ、観の強化法の実践は必須のものになっている。

たとえば座禅は、無や空というものの中から湧きだす悟りの境地を体験する「天台小止観」の修法であり、これは観の修法のひとつである。

また、「十牛図」の中の一枚「人牛俱忘」として知られる図を用いた観法も、密教の基本観法である「月輪観」に酷似している。

いずれにせよ、念法加持の入門は、観の強化、念の強化から始まるのだ。

基本観法行——月輪観&阿字観

さて最初は、2大観法である「月輪観」と「阿字観」を簡単に紹介しておこう。この観法は、すでに本誌や『密教の本』でも紹介したことがある。また、今月中旬に発売予定の『密教不動護摩・印と真言』（ムーAVブックス）でも詳細に解説した。

ここでは簡単に述べるにとどめておくので、もし不明な点があればそれらを参照してほしい。ただ、どんな上級者になろうとも、この観法は必須の修行法であることだけは忘れてほしくないものだ。

月輪観

月輪観は、円を描いた白紙を用意し、壁などにかけて本尊とすることから始まる。

準備が整ったら、本尊を前にリラックスして座り、円が月のように淡く白く光る様子を、想像の力によって「観る」のだ。

①まず、本尊を目でよく見る。そして、心の中にも同じものを見出すようにする。

②それがうまくいったら、光る円が球となり、本尊の図から浮きでて目前に迫ってくる様子を観じる。

③これができるようになったら、次にこの球＝月輪が、小さくなって体内に入る様子を観じたり、逆に、宇宙いっぱいにまで巨大化する様子を観じたりする。

↑月輪観の修法。

阿字観

阿字観は、月輪の中に梵字「ア」が書かれた本尊を用いる。本尊は次ページの写真を参照して書いてほしい。

←智拳印が表現するのは、実に奥深い宇宙の真理だ。

→阿字観に用いる本尊（上）と阿字観の修法（下）。

阿字観のやり方自体は、月輪観と変わることはない。ポイントだけを述べておこう。

まず、月輪観の要領で阿字を見ながら、阿字から発せられるエナジーを心の中へ取り入れていく。

基本念法行——智拳印による念循環

さて、胎蔵界の大日如来は、梵字の「アー」によって象徴され、金剛界における大日如来は、梵字「バン」によって象徴される。またその印は、「智拳印」という迫力のあるものだ。

この智拳印は、密教の代表的な技である「九字」を切る際にも使用され、実にさまざまな奥義や秘儀を内包する神秘の印である。

ひとつの例をあげるなら、1本立てた左手の人差し指は、脊髄を上昇する生命の力と見る。

上に覆いかぶさった右手が、生命力を優しく包む物質的肉体、そして、左手の人差し指の先と触れ合う右手の人差し指によって、体内を循環する生命力、気、クンダリニー、さらには念の流れなどを表現している、ということになる。

心理学や医学に多大な反響を呼びそうな智拳印の驚くべき秘密については、またの機会に詳細にレポートしてみたいが、ここでは、智拳印を結び、体内を循環する力の流れ＝念を自在に操る訓練を行ってみよう。

観とともに、念の強化は念法加持の基本中の基本である。

◐念の循環行

正座、もしくは結跏趺坐で座し、手と肉体とが対応すると見て、観の状態へ入っていく。その対応は次のようなものだ。

左手の人差し指は脊髄と対応し、それ以外の握った指は座っている足に対応する。

左手の人差し指はまた、体の各部から集められた触覚などのさまざまな感覚を、信号として脳に伝えている様子をも示す。

右手の人差し指は脳の中の神経系を表し、その指の方向は、脳から発せられた信号が脊髄を伝わり、体の各部に伝達される様子を表している。

こうした対応を覚えたところで、実際の観に入ろう。

①体内の念をコントロールするにあたって、まずは、結ばれた印の中で、念が光となって循環するのを観じる。

最初は、両手の指の向いている方向に、念の光が流れるのを観じよう。

②それがうまくできるようになってきたら、左手の人差し指を上昇する光が、右手の人差し指以外の指に分散して流れ、右手の人差し指によって、再び左手人差し指に還元される様を観じる。

③こうして回転、循環を始めた念は、

↑←智拳印。左手の人差し指を立て、右手で軽く包むようにする。そのとき、左右の人差し指の先端が触れあうように組むのがポイント。

循環するほどにその明るさを強め、循環の速度はどんどん増していく。

④念の速度と明るさが、限界に近づいたかな？　と感じたとき、全身と印を組んだ手との対応を思い起こす。そして、全身においても、印の中での念の循環と同じことが行われているのを、まざまざと観じるのである。

こうして観じていくと、あたかも小さなアンプによって起こされた電気信号が巨大なスピーカーを鳴らすかのように、念の力は増幅される。そして、体に分散されていた生命の力は集約され、自己の観によってコントロールされるのである。

観によって念をコントロールする。この体験ができれば、念法加持の基礎は整ったといえる。

それは、没頭して観じれば、わずか数日で成るかもしれない。励め、励め、さらにも励め。この段階ではそれしかないのである。

⇐印を組んで行う修法こそ、密教最大の秘儀だ。

修二 密教の秘印

念法加持の最大の秘儀、すなわち密教における秘儀でもある「印」の秘密について、ここでいくつか明かしておこう。

密教における印は、手の指を組み合わせて行う密教独特の技である。

しかし、実際の修法においては、指の組み方や、印を用いるときに「どのような注意をはらえばよいのか」「どのような観を用いるのか」といった「口伝」が、たくさん存在することも否定できない。

また、修法を見る機会があっても、僧侶は袈裟の下などで印を結び、第三者からは見えない状態にしているため、実際に何が行われているのかはまったくの謎である。

宗派によっても多少の違いはあるものの、ここでは公開できる範囲の密教印と、その用い方を紹介しておく。

⇑印と真言、そして観の力によって、世界が変わる。

印と真言、そして観が一体となったとき、精神の力は、印（動作）、観（想像力）、念（念力）の三位一体によって現実の世界に影響を与え、自分自身と周囲とに変化を与えるのである。

この三力を通じて精神の光が増幅されたとき、読者の念は時空を超越した存在と共鳴し、読者自身がまったく信じられないほどの大きな喜ばしい偶然や慈悲となり、読者自身に返ってくるのである。

印の秘儀を通じて、見えない世界との交流がはかられたとき、読者は念法加持の秘伝に一歩近づいたことになるのだ。

なお、ひとつの印には、ここにあげた以外にもたくさんの意味がある。それらの神秘的な意味は、ひとつひとつ経験していくことによって、読者自身のものとしていってもらいたい。

外縛印 ●心身の緊張を除去する

前に述べた智拳印によって、形成された印と全身とを精神的に共鳴させる技法を得た今、次に体内の念の力を固定化する印を学ぼう。

外縛印は身体のリラックスを内面

⇐多くの口伝があるため、実際の修法で何が行われているのかは謎に包まれている。

のリラックスへと変化させ、内面のリラックスを外面へと変化させる印だ。仏教以外の他宗教でも、よく使用される印でもある。

この印を利用することで、人間は外面と内面、つまり、肉体と精神をリラックスさせることができる。そのため太古より、祈禱や祈願など、リラックスが必要な場合に用いられてきた。

外縛印を力強く結ぶと、体のどの箇所にムダな力、ムダな緊張が与えられているかがよくわかる。

外縛印を結び、念の集中の邪魔になるムダな力を抜き、精神集中を効果的に行えるリラックス状態をつくりだそう。

体内の念の力を固定化するには、真の意味でのリラックスが必要なのだ。繰り返し印を組んで、体のどこにも緊張がないことを確認してほしい。

内縛印 ●念を結晶化させる

強固な意志によって体の中の念を結晶化させ、1か所に集中・固定させてしまう印が、内縛印である。

この印を結ぶにあたっては、自分の手があたかも「箱」になったかのように観じる。

これは〝四角を基本に構成された〟金剛界曼荼羅の力と、内縛印とを共鳴させる手段である。また、印を結ぶことによって、強固な意志を表現した金剛界曼荼羅の力を導き入れる、もっとも効果的な手段でもある。

（賢明な読者は気がついたであろうが、先の外縛印は、胎蔵界と共鳴する。しかし、実際には、金剛界も胎蔵界も同じひとつの宇宙である。それは「金胎不二」といい表されるが、内縛印、外縛印ともその秘伝を表した印なのだ）。

内縛印を結び、意志の力が念を自由自在に操っている様子を観じるとよい。

すでに前の「修一」で念のコントロールは体得しているはずだ。内縛印との共鳴が成功すれば、さらに念のコントロールが自在にできることに気づくだろう。

ただし、肉体の外にまで念の作用をおよぼすことは、この段階では考えなくてよい。

⇓外縛印。両手の指を広げ、左右の指が互い違いになるように組む。自分から見たとき、指は手の甲側になる。その状態でギュッと握ればよい。

⇓内縛印。組み方の基本は外縛印と同じ。ただし、自分から見たとき、外縛印とは逆に、左右の指が手のひら側にくるように組む。

驚くべき秘儀・修法の世界

Books Esoterica 第1号 密教の本

◇密教超人編（空海、最澄、役小角、道鏡、霊仙、文観、天海など）
◇密教秘法編（求聞持聡明法、曼荼羅の修法、護摩・祈禱の法など）
◇特殊密教の世界（密教と性魔術、密教と呪殺術、密教と神道）
◇歴史・教義編◇密教の霊域◇仏尊の図鑑◇密教寺院ガイド
◇密教用語事典ほか貴重な写真多数を交えて網羅収録

密教の全貌を公開!!

絶賛発売中

定価1000円（税込）

学研 NEW SIGHT MOOK

←孔雀明王の尊像。この明王の力を借りれば、念を強化し、天空に飛翔させることができるようになる。やがては、自分のイメージを他人に送信することも可能になるだろう。

孔雀王秘印●念を飛ばす

孔雀明王は、天空や空想の世界に、精神の神秘力を飛翔させる力を持った明王であり、害毒を滅し、食らいつくす仏でもある。

この孔雀明王の秘法は「孔雀王法」と呼ばれ、密教の派によっては「門外不出の最大秘儀」とまでいわれるものである。

こうした孔雀王の秘印には、ある特定の対象に向かって自己の念を放つ場合に効果を増す働きがあるので、念法加持の基本のひとつとして、ここにあげておくことにする。

写真のように組んだ孔雀王印の人差し指、中指、薬指を、孔雀があたかも羽ばたくかのごとくに動かす。

印の動かし方は簡単なものではあるが、この印もやはり、観の力を十分に活用しなければ現世的な効果は期待できない。

その観は次のように行う。

①孔雀明王の尊像と手の印とが一体となり、自己の念が仏と変じて孔雀明王となり、その印の上に鎮座する。

②そして、羽の動きとともに念は輝く光を放ち、修法者が念をおよぼしたいと思うものに向かって力強く飛翔していく——。

孔雀明王の尊像を前にし、この観を行うことによって、念の力、念の光を強化し、自己の周囲に漂ってくる「邪気」や「雑念」をはらうことができるのだ。

そして、想念を飛ばすことに慣れてくれば、やがて他人の思考の中に自分のイメージを送信することなども可能になってくるのである。

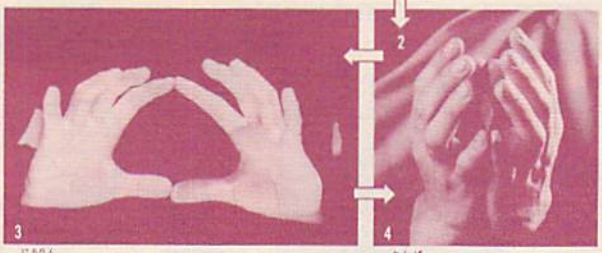
⇧孔雀王印。左右の親指と小指を密着させる。残った人差し指、中指、薬指は、互い違いに組み、孔雀の羽とみなす。

金剛合掌→蓮華合掌→日輪印→蓮華合掌

念を送りだす初心者向けの一連の動作としてもっともすすめられるのが、金剛合掌→蓮華合掌→日輪印→蓮華合掌のコンビネーションである。

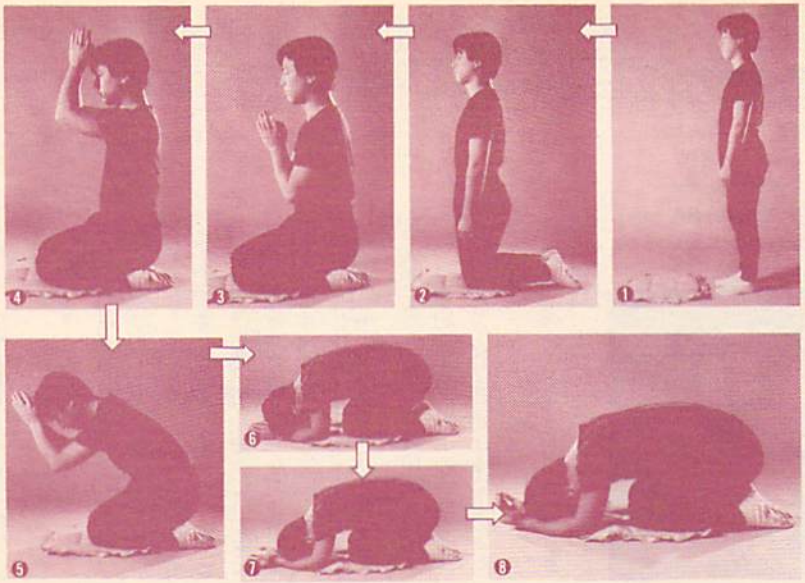
孔雀王の印は、手の先に集中した念を特定の対象に送るものであったが、いくつかの印を連続的に結ぶことによって、全身の念を非常に効率よく利用することができる。

⇩金剛合掌。両手の5指をやや開いて合掌し、両手を少しずらして指の先が入れ違いになるようにする。指の第1関節あたりで交差すればよい。



⇧日輪印。左右の親指と人差し指を触れあわせ、三角の形をつくる。そして、手のひらを外側に向けて残りの指をやや広げる。

⇧蓮華合掌。左右の親指と小指を触れあわせ、残りの指はやや離す。花のつぼみをイメージして組めばよい。



←五体投地。この礼拝のポイントは、合掌した両手の形にある。つまり、③で蓮華合掌の形をとるが、それを⑦で開くのだ。開き方は、花が開くように親指側を離していく。そして、⑧で上方に持ち上げる。

代表的なものでは、邪気をはらうもっとも効果的な方法「九字の印」などがある。ただし、想念の場合には別の法が望ましい。

さて、実際のやり方だ。

①まず、金剛合掌の形で、全身の気力を指と指の間に蓄える観を行う。

②次に蓮華合掌に移行し、軽く開かれた両手の間で、光り渦巻く念の力を観じるのである。

③このとき、無限光の仏である大日如来の真言「オン・バザラダト・バン」を唱えると効果的だ。

④念の光が極限にまで高められたと感じたら、日輪印へと一気に移行し、念の光を前方に押しだす。

⑤光は太陽のごとくにまばゆく輝き、光に照らされたものが清浄なる力を持つことを観じる。

⑥最後にゆるやかに蓮華合掌に戻り、放射された念が、周囲から霧のように合掌の中に戻ってくるのを観じる。

この技法は、神聖な仏像や曼荼羅図などに念を放射し、それらの象徴する力と共鳴し、増幅された力が体に回帰するように利用すると、最大の効果をもたらす。また、邪気を帯びた物体に行って浄化することもできる。

仏の持つ救済の力を有効に得たいと思うなら、「五体投地」という礼拝のあとに、この方法を行うとよい。そのときは、自分のかなえたい願望が念の光と化し、仏へと飛翔するように観じなければならない。

智拳印 念を集中させる

「修一」で智拳印による体内での念法を簡単に紹介したが、さらに具体的な形でもう一度、智拳印による念法をおさらいしてみよう。

念を凝らす、つまり念を凝縮するということは、精神の波動を集中させ、体の中で循環させることにほかならない。

普通は、この作用を身をもって知るのに1～2年の歳月がかかるようだが、智拳印を用いた念法を効果的に使用することで、修行の速度を速めることができる。

そのやり方は次のとおりだ。

①智拳印を結び、印の中に念の光を満たすように観じる。この段階は「修一」を参照すること。座法はもちろん、正座か結跏趺坐が望ましい。

②次に、印の中での観を停止し、額の中心、いわゆる第3の目と呼ばれる部分に手や足の先、体全体から念の光が流れ込み、直径2～8センチほどの光の球体が形成されるのを観じる。

③その球体を維持すること1～5分。今度は光の球体がそのままの形で首筋を通り、右肩、さらに肘、手首を通って右手人差し指に至るのを観じるのである。

④そして、右手人差し指と左手人差し指の接点で、一度、この光の球体を静止させ、10～90秒ほどそのままの状態を維持する。

⑤次に、光の球体は左手人差し指から、手首、肘、肩、首を通って、もとの額へと返ってくる。

この行法を繰り返すことによって、念は強化され、やがて智拳印を結ぶだけで、念を集中させる状態へと移行できるようになるだろう。

智拳印は神秘の力が宿っている秘印だ。その働きを借りて、念のコントロールを自分のものにしてほしい。

北斗印 ◐宇宙エネルギーの充塡

北斗七星を表す「北斗印」を用いると、宇宙的なエネルギーの流れを感じ、体内に取り入れて使用することが可能となる。

北斗七星の力が最大になるのは、新月の時期。実修はそのときを選ぶといいだろう。

①新月の夜に北斗七星の方向、すなわち北を向いて北斗印を結ぶ。印を結んだ親指の高さが、口の高さになる位置がいいだろう。

北斗印は、一見、蓮華合掌にも似ている印だが、指がすべてまっすぐになっていることに注意。

②親指以外の8本の指がつくる7つの頂点が、北斗七星の7つの星と光の線で結ばれているのを観じる。小指は2つでひとつの頂点をつくることになるので、ひとつと数える。

③そのまま親指を印の内側にゆっくり寄せていくと、自然にへその下（丹田と呼ばれる部分）が温かくなったり、心が落ち着いてくるのがはっきりわかるだろう。

④親指をもとの位置に戻し、息を整えたあと、再び親指を内側に寄せる。

⑤この動作を3度繰り返し、最後に金剛合掌を行って、北斗七星の力と自分とが共鳴できたことを感謝して一礼し、終了する。

だれでも感じることのできるこの北斗七星の力を利用した手法が、密教の秘法・北斗法である。

もし、北斗七星の力や影響を感じられない人がいたら、腹式呼吸、月輪観、阿字観、智拳印による念の強化法などを行って、自己の念や観を強化していくとよい。

◐成功の鍵は観にある

ここで紹介した印自体は、そんなにむずかしいものではない。何度かやってみれば、すぐにでも組めるようになるはずだ。

しかし、これまでいってきたことでおわかりのように、すべての利益は観によってコントロールされた念の働きによる。

印を組み、かつ観ずる。念法加持の秘密はそこにこそある。観に成功するか否か、それがすべての鍵を握っているのだ。

口伝にこうある。

「観は意志による。意志は心による。心は己自身による」

そう、最後は己がやるかやらないか、それだけのこと。教えや導きは問題ではないのである。やはりこれも、励め、励めである。

⬇北斗印。左右の親指と小指を触れあわせ、残りの指は手の甲側に反らせながらまっすぐ伸ばす。

実修では、触れあわせた親指を、自分から見て外側（印の内側）に寄せたり戻したりする。

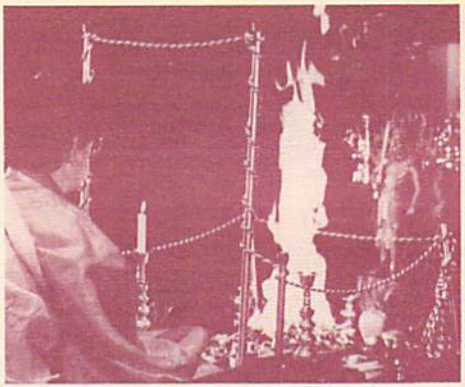
修三 応用念法加持

さて、ここまでの修法によって、念法加持の基礎技法を身につけることができたならば、さまざまな手法を応用した、加持祈禱の体験、研究に進んでもらいたい。

筆者はあらゆる機会を通じて、それぞれの人にあった念の開発法、そして、念を現実の世界に強く生かす各種秘法を公開、伝授しつづけている。

これから解説するいくつかの技法は、超心理学という机上の理論ではなく、密教の名のもとに隠されてきた実践秘術の一端である。

ひとつひとつの作法や印を象徴的に解釈して、その真実の意味を解き明か



←密教の奥義、不動護摩の修法。燃え上がる護摩の炎と不動明王の尊像が、強力な現世利益を与えてくれる。

し、観の力と作法が仏の力と共鳴するとき、修法の真の意味と超越力とが呼び起こされる。

「天部の仏」と呼ばれる仏たちは、現世で行われる行為や現象を司る仏である。そうした天部の仏をはじめとする、個人的な現世利益の強い仏を修することによって、直接的な利益を得る天部の仏の法は、「不動護摩」をはじめとする「加行」と呼ばれる修行を積んだ者だけが行える法とされる。

しかし、現世利益のみを追求しているかのような天部の修法も、実際には天部を通じ、宇宙原理の根本仏「大日如来」の境地や思想に到達するための一技法であり、超越的な次元の変化を現実の世界に反映させるための技法なのだ。

ちなみに、不動護摩法の本尊、不動明王は、大日如来の怒りの化身であり、大日如来の能動的な現世利益の力が凝縮した仏である。

仏教の真意、あらゆる宗教、あらゆる神秘学の真意は、感謝と満足感、そして、仏の意識から放たれるダイヤモンドの輝きよりも金の輝きよりもすばらしい、値これ世に勝るものなしの十力の金剛石を現実世界の中に見出すことにある。

ある者はそれを「賢者の石」と呼び、ある者は「舎利」と呼ぶ。また、ある者は「錬金術の金」と呼び、精神の内面に輝くこの貴石を得ることが、修法者の目的のひとつであった。

超能力を得る、仏や神と出会う、宇宙的な意識の流れと一体化する、などという願望達成の技が、最終的には宇宙的秘儀の一端であるということを実感しつつ修してもらいたい。

透視能力

●意識の空白を観じる

瞑想の際、予期しないほど速くのものまでが、なぜか〝理解〟できる一瞬がある。

深く瞑想していればいるほど、そうした現象が起きやすいのだが、こうした透視現象は、数息観や月輪観といった基本修行の際にもしばしば起きる。

特に透視しようと集中して行うより、初心者は意識をからっぽにして、無意識の中に浮かび上がる形象を得ようとする受動的な態度のほうが、より正確な結果が得られる。

あたかも自分自身が周囲の世界からの電波を受信する「ラジオ」であるかのように観じると、自然に周囲の状況が自分の中に流れ込んでくるのだ。

①さて、実修は、結跏趺坐して北斗印を組み、意識を空白にして観の状態に入る。

②そして、自分は受信器なのだから、こちらから働きかけることは何もない。ただ意識を空にして、浮かび上がる形象を受け取るだけだ……と観ずる。

③その状況そのものを追いつづけていくと、やがて目に見えない世界や、物理的に見ることが不可能なものを観じることができるようになる。

④観の訓練で得られた力を利用して、意識の中のスクリーンにはっきりと観じることができるようになればしめたものだ。

あとは、その状態を客観的に分析して、うまくいくタイミングと失敗するときのタイミングを理解し、うまくいくタイミングのときだけ透視に全力を傾けるとよい。

●土中の布袋像を透視

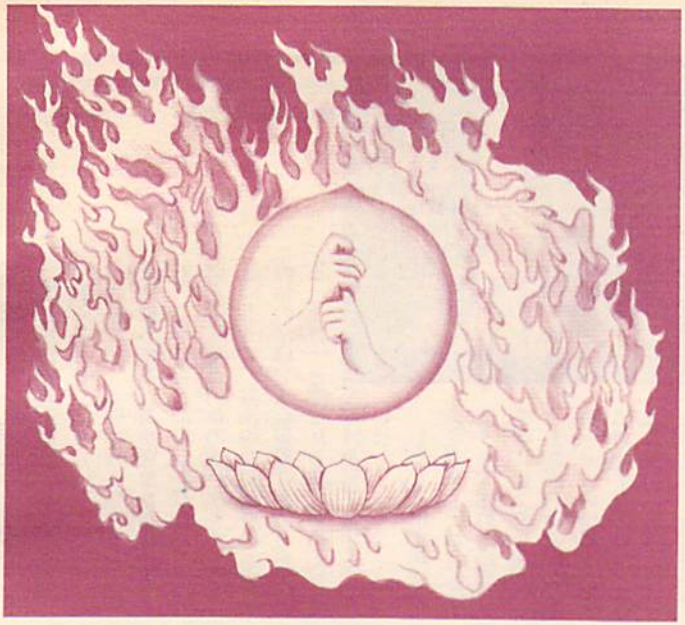
東京の中野区に哲学堂という神秘的な公園があり、そこには長いこと土中に埋もれていた井戸があった。

ある日、筆者がこの公園の一角で瞑想を行っていると、太った僧侶が泥水の中に埋まっている様子を観じた。

瞑想をしていた場所から数十メートル離れた場所が脳裏に浮かび、その土中に埋もれている様子が見えたので、ただごとではないと思った筆者は、近くに落ちていた棒きれを持って走り、その場所を掘ってみた。

はたせるかな、その土中からは、福福しく太った僧侶の姿をした布袋の像と、うがってあった井戸の穴を発見したのである。

それから10年近くが経ったが、今ではその井戸もすっかり掘り起こされ、



水は出はしないものの、布袋さまの福福しい姿を拝することができるようになり、うれしい限りである。

こうした透視は、意識的、無意識的どちらでも引きだすことができる能力だが、偶然の中から一瞬にして生まれた透視のビジョンのほうが、意識して行った透視よりも非常に高い確率で的中するものである。

護摩の炎に意識同調

ここで、筆者がつくった「不動護摩ビデオ」を利用する場合の例を、少しだけ解説しておこう。というのも、映像を利用して観じるため、初心者には最適の修法だからだ。機会があれば、ぜひ試していただきたい。

さて、護摩による観じ方のポイントはこうだ。

①まず、燃えさかる護摩の炎に意識を同調させ、雑念をどんどん炎の中に放り込んでいく。

②雑念が焼きつくされることにより、気持ちに空白ができてくる。

③そうなったら、空間を伝わる気配の流れ、意識の流れを全身で受けとめることに専念する。

こうした観がうまくいけば、かなり強い透視状態を生みだすことができるのだ。

護身法

透視を行う場合、また予知能力を開発する場合、できれば密教技法のひとつ、護身法をこなしておくことをおすすめする。

意識の空白をつくって、周囲の気配や気の流れを受信する状態に入るということは、悪い波動の影響も受けやすい状態でもある。

超能力の修行者が、一度の失敗で手品などに走るのも、護身法を行っていないために、邪悪な気などに惑わされやすいためだ。

人間は多かれ少なかれ透視の素質があるのだから、偽りの技や見せ物に惑わされる必要はない。

読者は、本誌や『密教の本』を通じて何度か紹介してきた「九字」や各種

ムーAVブックス第3弾　30分VHSビデオテープ&192ページ変形新書判単行本

ビデオ＋本を活用すれば、30分で密教の秘法が学習できる!!

◎究極の願望達成秘法
「密教不動護摩」——

印と真言

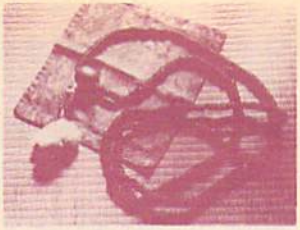
7月中旬発売予定

■金澤友哉　著

定価2700円（税込）

◆密教加持祈禱の超常的威力◆密教の基礎修行・超集中力の開発（沐浴、五体投地の礼、月輪観、阿字観）◆秘法・念法加持による念力開発（念法加持、字輪観、念力を活かす観想法、護身法、結界法、道場法、弾指の礼、十八道契印）◆密教護摩祈禱の最奥義（各明王の利益と真言、超能力の開発、秘法中の秘法ほか）

学研



➡数珠や線香を使うことで、邪悪なものからの悪影響を切り離すことができる。

護身法を用い、精神を悪影響から切り放すといいだろう。

より簡単には、線香を焚きしめる、塗香を体につける、数珠を手に持つ、仏壇に向かい鐘を打ち鳴らす、などの方法の中から、ひとつを選んで実行するだけでも十分な効果が得られるので試してもらいたい。

いずれにせよ、以上のような修法を何度も繰り返していくと、能力はさらに強化されていく。そして、透視能力は、予知能力の練習にすぎないこともつけ加えておきたい。

筆者は、行法を通じて得られた知識やアイデア、密教やあらゆる神秘学、神秘的実践の裏にある「神秘的本質」を読者に伝えたいために、行法を続けている。

読者もいずれそうした境地に達したならば、自分の体験を広く伝えてほしいものである。

予知能力

◐時空の網を観じる

物理的空間の意識的座標軸を超えて理解を得る能力が透視能力ならば、時間の意識的座標軸を超越して理解を得る能力が予知能力である。

簡単にいえば、意識を空間の上でスライドさせて「観る」のが透視ならば、意識を時間の上でスライドさせて、はるかな未来を「観る」のが予知ということになる。

動物は、生まれながらに危険回避のための基礎的な予知能力を持っており、知らず知らずのうちに危険を避けたり、また人間でも、虫の知らせで事件を回避した話などは、読者も何度か聞いたことがあると思う。

こうした予知能力を獲得するには、「虚空蔵菩薩求聞持聡明法」が最高の秘儀とされている。

この技法を習得すると、アカシック・レコードと呼ばれる、高次元の記録にアクセス可能になるのだが、この秘儀に関しては、機会を改めて詳細に報告しよう。入門としては高度すぎるからだ。

なお、アカシックとは虚空蔵という意味で、仮想的な時間軸上に、すべての記録や事件が蔵されているかのように納まっているのに由来して、この名がある。

アカシック・レコードは西洋的な神秘学用語ではなく、密教およびチベット密教から発生した言葉。アカシャ・ガルバ＝虚空蔵菩薩は、このアカシック・レコードの守護神である。

さて、ここでは、あらゆる時間と空間を超越した神秘存在、大日如来の真言と尊像を用いることによって、予知能力の世界に肉薄する技法を紹介しておこう。

◐時空が網のように広がる

大日如来は、胎蔵界曼荼羅、金剛界曼荼羅の両曼荼羅の中央に座しているが、金剛界における大日如来は、すべての場所と法則と時間軸を超えた存在とされている。

そこで、金剛界大日如来を表す梵字である「バン」と、その印である智拳印を用いて、曼荼羅や不動明王の背後に広がる、時間と空間が網のように広がる世界を観じていくのである。

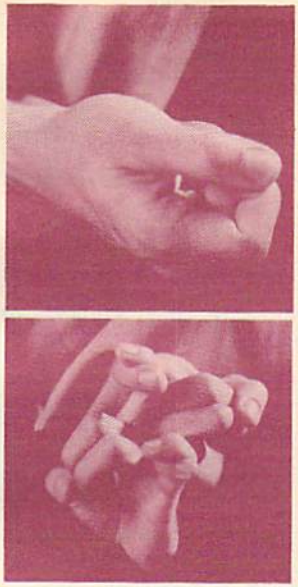
修法は次のようだ。

①結跏趺坐し、智拳印を組む。

②そして、自分の精神を時間と空間の

⬆大日如来の尊像。あらゆる時間と空間を超越した神秘存在であり、修法による利益は、はかりしれないものがある。⬅大日如来を表すとされる梵字「バン」。

➡護摩の炎を強く観じ、その背後に時空が網の目のように広がる様を観じてもよい。



←簡略化した鈎召法に用いる印。握りこぶしをつくり、人差し指を釣り針のように曲げる。左手も同じ形にし、あとは2本の人差し指をひっかければよい。☛本格的な鈎召法に使う印はかなり複雑な組み方になる。

網の目の中に飛翔させると観ずる。

もちろん、その観は深いうえにも深いものでなければならない。修法を積むことだ。

③初心者なら、「不動護摩ビデオ」を利用し、護摩の炎を強く観じる。そして、炎の背後に、時空が網目のように広がっているのを観じてもよい。

④また、金剛界曼荼羅や大日如来像を用い、中心に意識を集中させ、背後に広がる時空間の網の目ひとつひとつに意識の光を当てていく観法もある。

この技法には、念法の極意である、本尊をレンズにして、さらに超越した空間に迫る観の奥義がある。

⑤どの技法でもいいが、こうした修法を続けていくと、やがて、網の目の中にさまざまな象形や象意が見えてくるようになる。

⑥そうしたら、観の力を最大限に発揮してその様子を固定化し、分析するのだ。

いずれにせよ、虚空に広がる時空の網。ここに触れた者は、必ず精神世界でも一段と進化をとげることだろう。

そして、意識をスライドさせて、未来を「観る」こともできるようになる。そうなれば、念法加持の奥義の一端を体得したことになるのである。

鈎召

◐物品引き寄せ

密教の神秘技のひとつ、鈎召。これは、物や人間などを引き寄せる技であり、その使用のツボを心得ていれば、真に実用的な超能力となりうるものである。

本格的な修法では護摩炉や各種作法が必要になるが、ここでは印のみを用いて行う簡略行を紹介しよう。

①右手、左手とも握りこぶしにして、人差し指のみを出す。

②それから、両手の人差し指を釣り針のように曲げ、右手が上になるように2本の人差し指をひっかける。

③願いを申し述べる際には、この印を前方からゆっくりと手前に引き寄せるようにして、さらにはその先に、引き寄せたい物や人がついてくる様子を観じるようにする。

実際の鈎召法ほどではないにしろ、これだけの観でも、印の持つ引き寄せの力を利用することができる。

ちなみに、鈎召法を行う場合、衣服などに用いる色は赤がよいとされている。可能ならば、そうしたほうがいいだろう。

◐目的を明確にする

鈎召法は手に入れたい物や、見つけたい物を具体的にしなければ意味がない。漠然とした対象では、どのような結果が得られるか保証できない。

たとえば、ある行者は金銭を得たいと思い鈎召法を行ったが、親の死によって保険金を得るという事態に遭遇してしまった。実際に金銭などを手に入れたいときは、それ相応の修法を行うべきだ。

鈎召は「会えなくなった人と再会したい」「家出人の引き寄せ」「紛失物の引き寄せ」「捜し物の引き寄せ」「貸した物を取り戻す」「ある人と知り合いになりたい」などといったときに行うべきである。

◐鈎召の口伝

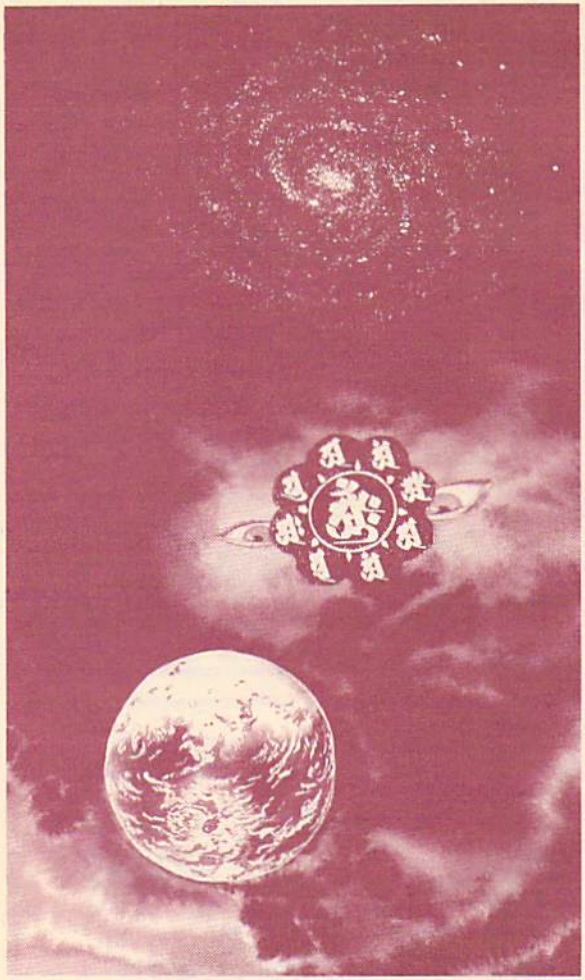
こうした修法を行うタイミングやコツは、実践を積まなければ会得できないものであり、また、人によっても微妙に違ってくるものである。ベテランと呼ばれる密教僧はこうしたコツを体得しており、そのノウハウこそが密教秘儀なのである。

筆者の場合のコツを口伝としてあげておくと、

「持ってこれる瞬間を察知したら、手元にグイッと引き寄せて、さらにからめて手中に入れる。あたかも波によって打ち寄せられる木片のごとく、いともたやすく……」

ということになる。

読者も修法を重ねることによって独自のコツをつかみ、大きな運勢の波に乗り、より大きな幸運と成功を手にしていただきたいものである。



おわりに

どんなに利益のある大秘法といえども、「観の力」「念の力」「想の力」が研ぎ澄まされていなくては話にならない。

単調な呼吸法や観法を実践していき、期待感や邪念がすべて消え去ったとき、精神の中に真の魂の自由を見出す一瞬を手に入れることができる。

念法加持の極意である「想念を練り、強大な念の力が与えられる状態」を導師から受けることができれば、かなり楽にこの状態に到達できる。

また、「入我我入観」といわれる密教の技法を応用した念法の導念術や観導法など、念を引きだすための誘導法もある。それを受けることにより、体内レベルや精神レベルで滞ってしまった「念の流れ」をスムーズにし、すみやかに念力を発生しやすい状態へと導くこともできる。

ほかにも、名称をあげることさえ禁じられている秘法が多数ある。護摩法やここで紹介した各修行法が広い門戸を開放している「万人向け」であるのに対し、こうした秘法の世界は、神秘の力と人間の常識を超えた「専門分野」である。

筆者や周辺の仲間は、「北斗法」という古い密教奥義を中心に、各種の密教秘儀を現代に復活させ、その実践を行っている。こうしたものは、宇宙の法則や力を、人間の活動する世界にもたらす宇宙的秘儀である。

最近、チャネリングと称した宇宙からの意思交流や、異星人の来訪を願ったり、異星人の生まれ変わりを前面に押しだした思想などが広がっている。

だが、われわれ地球人も宇宙そのものの一部であり、その意識はもともと宇宙と一体なのである。

密教では、宇宙の背後に広がる超越した意識を「宇宙の大暗黒神（マハーカーラ）」、すなわち「大黒天」と呼ぶ。そして、宇宙そのものがもたらす恵みと、夜の静寂な世界が与えてくれる安息の時間、幸福の時間を願い、日本人はこの神を七福神のひとつとして崇拝してきた。

また、日本のどの家庭でも行われている「七夕」の行事は「北斗七星信仰」の一端であり、実は背後に、密教の北斗七星信仰＝北斗法の秘儀を伝える行事なのだ。

こうしてわれわれは、知る知らないを別にして、宇宙の中に生き、宇宙に感謝を捧げ、宇宙がもたらす恵みを受けて生きているのである。

密教の奥義はまさにここにある。

もし読者が密教の秘法と、その具体的な修法を通じて、宇宙のもたらすそうした恩恵に触れたければ、かまわずに門を叩くとよい。

心配することはない。門はいつも開かれている。ただ、普段は気がついていないだけなのだから。

写真＝円成寺／高野山文化財保存会／学研資料室